

去勢手術と避妊手術

去勢手術や避妊手術は、子供を作らないことを第一の目的として行われていましたが、今はあくまでそれは目的のうちの1つでしかなく、発情や性ホルモンによる身体の負担を抑えることがその一番の目的となっています。

現在では、性ホルモン剤の投与やインプラントで、その目的を達することも可能になりましたが、その効果の持続が短いこと、副作用が強いこと、施療後の糖尿病や子宮蓄膿症の多発などから、1) 現時点での繁殖は行わず、近い将来に繁殖予定がある、2) 皮膚疾患や内分泌疾患、子宮蓄膿症、前立腺肥大症、腫瘍等の治療の為～などの特殊な例を除いて、危険が伴うため行わない方がよいと考えられています。また、止むを得ず実施する場合も、細心の注意が必要です。

また、これらの外科手術は、決して1) 発情を起こさない、2) 発情行動・問題行動を阻止する～ためだけに行われるわけではありません。他には、3) 発情や性ホルモンの身体への負担、性ホルモンの悪影響から引き起こされる精神疾患の予防・治療、4) 動物福祉を考えて、5) 社会生活のマナーを考えて、6) 性ホルモン由来の疾患の予防・治療のため等があります。一般的に、外科手術の実施は疾患であれば止むを得ないわけですが、去勢・避妊手術は健康体に外科手術を行うのですから、飼い主さんが不安に思う場合も少なくありません。逆に、安易に考えたり、「とりあえずやっておけば」という考え方であったり、体調を考えずに行われたり、不適切な実施により不幸な結果になるということもあります。

発情が起こること、これは生きている動物では当たり前のことです。特に、動物は本能的に種族を繁栄させる為に、性衝動が強くなるように身体の機構が出来ています。よく、「動物は自然が一番」といって、「発情が起こるままにした方がよい」、人のエゴで手術をするのは、むしろ「動物がかわいそうだ」と議論されることがあります。確かに一理ありますが、これはあくまで野生動物、ないしは動物だけの世界で生きる動物たちにしか当てはまりません。これには重大な落とし穴、ないしは考え違いがあるのです。なぜなら、この考え方と言うと、まず動物を「人が飼うこと」、ましてや「都会で飼うこと」これ自体動物にとっては不自然だと言わなければなりません。

しかし、犬や猫は人と共存する事を自然として受け入れた動物で、数千年人と共存した歴史があります。ですから、人と生きてこそ「犬や猫にとっての自然である」ということを忘れないで下さい。犬や猫に、人の作った「明らかに不自然な自然」を押し付けるのではなく、何が人と動物の関係で必要・重要なのか、これをよく考えなければいけません。

あくまでこのような人と動物の共生は、お互いの約束を守って成り立つものです。人は、動物の暮らしやすい環境の整備や理解・啓蒙、しつけ、道徳・倫理の向上に努力をし（動物福祉）、動物は自分だけでなく人の社会で生きていくように順応します。その結果、お互いに純粋な愛情のやり取りが行え、癒しや家族を得ることができ、さらに動物は保護されることで生命を守ることが出来ます。皆さんが、人と動物のルールを守って、適切な環境で、愛情を持って、動物に対しての考え方やモラルを進歩させて、そして医療の進歩があり、年々犬や猫の寿命は延びているのです。

去勢手術・避妊手術の大きな目的あるいは考え方は、

- 1、発情の度に交配や妊娠、出産をするのが自然と考えるならば、これをさせずにいることは不自然です。発情は、それだけでも雄・雌共に精神的かつ肉体的に大きな負担をかけますが、発情行動に対してそれをしつけや我慢で乗り切るとは、さらに大きな苦痛であり負担になります。この負担を軽減する事が第一の目標になります。
- 2、人と動物の共生の中で、不用意に犬や猫を増やし続けることは、人にも動物にも害になります。子供を産まないようにする事は、やむを得ないことと考えられます。これは、あくまで人に責任があるわけですが、飼育放棄や遺棄、劣悪な環境での飼育など動物が不幸になる事例は後を絶ちません。
- 3、発情の度に、交配や妊娠、出産をしていけばよいというわけでもありません。なぜなら、妊娠や出産は人と同様に命がけであり（例えば、犬の安産は日本のことわざで、皆さんと一緒に暮らしている子の大半は海外の犬ですね）、感染や疾患の発症、分娩という命懸けの行動が伴うわけです。また、妊娠や出産を繰り返していれば身体的負担がどんどん大きくなっていきます。そもそも動物の妊娠は、人の希望で行われているものであり、その希望に動物が応えているだけでもあります。
- 4、生殖器系の疾患が増えており、これらは長寿になったことだけでなく体質や生活様式の変化、環境ホルモンなども関与しています。乳腺腫瘍や子宮蓄膿症、卵巣・子宮の疾患や腫瘍、精巣腫瘍、前立腺疾患、会陰ヘルニア、肛門周囲腺腫などがこれに当たり、これらの疾患の最適な治療法は去勢・避妊手術よりも難易度やリスクが高い外科手術となるため、これらの予防となることも大きな利点となります。実際に、去勢・避妊手術を行わずにシニアを迎えこれらの疾患を発症することが多く、治療が不可能であったり、治療自体が身体に大きな負担をかけることが多く見受けられます。
- 5、ただし、病気の予防だけを考えた外科手術は、疑わしければ何でも切除してしまうという過剰医療ということにもなりますので、予防だけを考えた外科手術は正しいとは言えませんので、これらの予防効果はあくまで付録や特典と考えるべきでしょう。
- 6、去勢・避妊手術による性ホルモン失調性疾患（皮膚疾患や尿失禁等）が指摘されておりますが、これらはごく少数で治療も可能であることが多いもので、大きな問題とはなりません。しかし近年、尿石症や腫瘍の発生のリスクが増えることが分かってきました。そのため、去勢・避妊手術を行うかどうか、これらの疾患のリスクと行わないリスクをしっかりと考え、慎重に判断しなければいけません。
- 7、去勢・避妊手術は、人との共存を守る事とともに、動物の身体を守るため、現時点での道徳や倫理、動物愛護や福祉、獣医療の考え方の中で、最良の方法ひとつとされていますが、近年報告のある誘発疾患は、苦痛や生命の危険に関わるため、そのリスクも考慮に入れるべきと考えられます。

外科手術について

1、外科手術には、下記の方法があります。動物の体質や性格、年齢、既往症、基礎疾患、生活環境、容態によって、方法を選択します。

去勢手術：精巣摘出術、精嚢摘出術（疾患時）、停留精巣（皮下織内・腹腔内）摘出術

避妊手術：卵巣摘出術（健康な猫、一部の犬）

卵巣子宮全摘出術（健康な犬、発情中・疾患時の犬・猫）

2、全身麻酔は、当院ではイソフルレン吸入麻酔（別紙参照）にて実施します。この方法は、現在の獣医療では最善の麻酔方法として認知されています。一般的には、費用をおさえる目的と共に処置や管理が簡便なため注射麻酔で行われることが多いのですが、注射麻酔法は本来特別な管理が必要であり、一部の注射麻酔法を除き安全性に問題が生じる場合があるため、安全性を最大限に考慮して、上記の方法以外では行いません。

3、外科手術や全身麻酔の安全性を高めるため、健康で若齢、簡単な処置でも一定レベル以上の術前検査を実施することをお勧めします。これは、現在健康にみえても、症候や病状を表しにくく、病気の進行が早いという動物の特性を考えてのことです。隠れているあるいは微かな機能低下や機能障害、関知できていない基礎疾患を見つけ、その結果から病状の変化や術後合併症等を予測し、最適な手術法や麻酔法を決定し実施するためです。

しかし一般的には、去勢・避妊手術の場合、費用をおさえる為に身体検査のみで済まされることが多く、術前検査は基礎疾患が存在する場合や疾患罹患時、高齢の場合などは絶対に行われるます。

結果的に術前検査に異常がないことが多いのですが、中には術前検査により疾病が認められたり、術前検査を行っていなかったために合併症を呈した事例も少なくありません。より安全に外科手術や全身麻酔を行うため、また最善の獣医療を行うためには、当院ではもちろん強制ではありませんが、事前にご説明させていただき、ご相談いたします。

当院ではその点をふまえて、体調が安定し、健康と思われる基礎疾患や既往症のない若齢の犬や猫の場合には、術前検査の是非を飼い主さんの意志にお任せすることも多くなります。ただし、術前検査を実施しない場合、そのリスクを負っていただくことをご了承ください。

4、事前に混合ワクチンの接種が済んでいることが前提となります。

5、当院では最善の獣医療を提供するよう努力しています。そのため、上記事項～生命に関与する事項について、省略することについては希望されても同意いたしません。一部病院では、安価に手術を行うため、ワクチン接種や術前検査の省略、手術法や麻酔法の省略、術後管理やインフォームドコンセントの不徹底などがなされることがあります。これは、止むを得ない場合があることも理解しておりますが、

生命の大切さは全て同じという考え方から、獣医師として行うべきではない行為と考えております。

例えば、もっとも簡単なことでも、

- ・回復の遅れや自宅での術後管理が行えない等の状況での無理な退院：術後の体温低下や嘔吐、体調不良などを悪化させたり、それらに対処できないこととなります。
- ・抜糸不用の吸収糸ないしは縫合法での手術：メリットもありますが、長期間の違和感や苦痛、術創の感染や癒合不全などの弊害が出る可能性が大きいです。
- ・事前のインフォームドコンセントや準備が不十分な状況での外科手術や全身麻酔は、特に危険です。

6、上記事項は、野良猫や外猫の場合も同様に考えます。

7、手術当日までの生活や体調の変化、術前検査結果の異常、自宅での準備（特に絶食や絶飲など）の不徹底などにより、外科手術や全身麻酔が不相当と診断された場合には、延期させていただきます。尚、飼い主さんの準備の不備による延期につきましては、外科手術のための前日からの準備にかかりました費用をご負担いただきます。

8、去勢・避妊手術により、性格が変化することはありません。ただし、性ホルモンにより影響を受けていた性格（過剰行動や攻撃性等）が、変化することがあります。

9、去勢・避妊手術により、肥満が起こることはありません。ただし、性行動や性周期の消失、興味の欠如、食欲への欲求の高まりから、あるいは内分泌の変化などによる体質の変化から肥満しやすくなることはあります。これは、食事や運動の管理、生活環境の整備、飼い主さんの意識で充分予防できます。

10、前に述べた去勢・避妊手術のリスクを回避するためには外科手術の断念となりますが、発情行動（特に猫）や外陰部からの出血（特に犬）、雌への関心の増長（犬および猫）、男性ホルモンによる過剰な攻撃性の発現（犬および猫）、そして老齢時の性ホルモン疾患の発症などのリスクもしっかりと考えなければならず、これらの対処として去勢・避妊手術を行う必要も考えなければいけません。